

大阪大谷大学

令和六年度 入学試験問題（一般入試・中期）

国 語

注意事項

- 一 問題用紙は、全部で九ページです。解答用紙は一枚です。
- 二 解答用紙の所定欄に受験番号と氏名を記入してください。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に記入してください。
- 四 問題用紙は持ち帰ってください。

□ 次の文章を読んで、後の問に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

アメリカで一八七一年に印刷会社のキャリアー&アイヴズ社が制作した『熱帯の果物』というタイトルのリトグラフがある。リトグラフとは版画の一種で、部屋に飾るインテリア用絵画として主に中産階級向けに販売され人気を集めた。私は、この絵を初めて見た時、一五〇年も前に描かれた果物が、今とさほど変わらない形や色をしていることに驚かされ、当時の人々も自分たちと同じような食べ物を見たり食べたりしていたことを不思議に感じたりもした。

絵のタイトルにある「熱帯」とは、ここでは主に中南米や、フロリダ州、カリフォルニア州を指しているのだが、これらの地域は、単に温暖な土地であるというだけでなく、十九世紀のアメリカでは、ヨカ^aを過ごす「パラダイス」というイメージでもって語られることが多かった。こうしたイメージは、中南米におけるアメリカの政治的・経済的覇権の拡大や、フロリダ・カリフォルニア両州の合衆国領土へのヘイゴウ^bといった歴史的背景から、帝国主義的関係の中で作り出されたものでもあった。

カリフォルニア・フロリダ両州は、アメリカにおける柑橘類^{かんきつるい}の一大生産地であり、カリフォルニアでは、ブドウの生産も盛んに行われていた。i、中南米ではバナナやパイナップルの生産が拡大しつつあった。『熱帯の果物』が制作された一八七〇年代は、ようやく冷蔵技術や長距離輸送技術が発達し始めた頃で、こうした「熱帯」からの果物が次第に国内全土で広まろうとしていた。だが依然として高価な食べ物で、一般の人々が普段の食事で口にすることは稀^{まれ}だった。そうした珍しい果物を描いたのがこのイラストである。

現代の私たちにとっては見慣れたものとなったこれらの果物だが、よく見るとその中に違和感を感じるものが一つ。私たちが普段目にする黄色いものの他に、赤茶色のバナナが見える。このバナナは、通称「レッドバナナ」と呼ばれ、茶系もしくは赤紫色に近い皮をした品種である。一八四〇年代、初めて中南米からアメリカへバナナの輸出が始まったのだが、それから十九世紀末頃までは、レッドバナナと黄色いバナナの少なくとも二種類がアメリカでは販売されていた。ii、当時の人々にとっては、どちらのバナナも違

和感なく受け入れられる「正しい」色であった。だが次第に、アメリカへの輸出用バナナは黄色い品種のみが生産されるようになったのである。時代はもつと後になるが、日本では一九〇三年（明治三六年）に商業的なバナナの輸入が始まり、主に台湾産の黄色いバナナが取引されていた。その後、エクアドルやフィリピンからのバナナが主流となったものの、アメリカと同様、黄色いバナナが八百屋やスーパーの棚を独占してきた。

似たような事例は他にもあり、例えばトマト。何色を思い浮かべるだろう。スーパーで一般的に目にするのはほとんどが赤いトマトで、それが自然な、もしくは普通の色だと思う人も多いのではないだろうか。iii、歴史を遡って見てみると、紫に近い色や黄色いものなど数多くの品種が存在し、色や形、そして味や食感も様々である。

現代の色彩豊かな視覚環境の中で、色を意識して見たり考えたりすることはあまりないかもしれない。例えば、トマトは赤く、バナナは黄色いものが「正しい」色とされ、それが自然な色だと疑わない。だが実は、私たちが「当たり前」だと思える食べ物の色は、自然と人工の間で作り出されてきたものでもあるのだ。

なぜ人は、ある特定の色をその食べ物の「自然な」色だと思えるようになったのだろうか。また、なぜ今日、スーパーで見かける品種・色は限定的で画一的なのだろうか。iv、食べ物の色に表れる美意識や意味に文化差はあるのだろうか。

十九世紀末まで遡り、私たちが目にする世界がどのように作り出されてきたのか、食べ物の色に焦点を当てながら、その歴史を探る。例えば、農作物や肉・魚は、品種によって色や味が異なっており、一般的に市場で流通する品種は、国や地域によって様々である。こうした品種の違いやそれ固有の色や味は、気候条件やその品種の生体的特徴のみならず、生産・輸送技術や経済性など様々な要因に左右される。さらに興味深いのは、多くの消費者が普段当たり前に目にするようになった食べ物の色は、生産者らが様々な手法を用いて、よりおいしそうに、また自然に見えるように作り出したものでもあることだ。ここでは、そうした技術的、経済的、さらに政治的、文化的変化が、どのように食べ物の色を決定づけてきたのか考えていきたい。

洋服や自動車、化粧品など他の消費財とは異なり、食べ物の場合、トマトの赤やバナナの黄色のように、多くの消費者は、ある程度その食べ物の「あるべき」色を想定して買い物をしたり、食事をしたりしている。青やピンクのカラフルなシャツを買うことはあつて

も、紫色のキュウリやピンク色のバナナなどは（少なくとも日常的には）期待していない。突然、真っ青なトマトが^cチンレッツ^c棚に置かれていたら戸惑ってしまうだろう。果物や野菜、肉や魚の色は、食べ頃や熟し具合、新鮮さを見分けるための重要な^①指標^cでもあり、普段の買い物では、色を見てどの商品を購入するか決める人も多いかもしれない。だからこそ、農業生産者や食品加工業者らは、その食べ物¹の「自然な」色を再現し、時には「自然よりも自然らしく」見せるための技術やマーケティングに多大な資金と労力をかけてきた。

¹消費者の視覚に訴えることは、すなわち購買アピールにつながるからである。

色は、味や形など食べ物が持つ特徴のうちほんの一部ではあるものの、人の食欲をかき立てる（時には逆に失³せさせる²）。単なる物理的な食べ物の見た目であるだけでなく、自然と技術とが交錯し、味覚と視覚が絡み合い、そして生産者や消費者、さらには政府が^②せめぎ合う^②諸相でもあるのだ。

^d食べ物の色がどのように作り出されてきたのかを探るにあたって、色を二つの側面から考える。一つは着色料や農産物の生産過程の^dチヨウセイ^dなど、実際の食べ物の色を作り出す技術や方法といった物理的な側面。もう一つは、人がある食べ物の色をどのようにして「当たり前」だと思おうようになったのかという、認識的側面である。例えば、料理本や企業の宣伝広告に印刷されたイラストは、多くの人々に食べ物のあるべき色を視覚的に伝える役割も果たしていた。冒頭の『熱帯の果物』なども同様で、印刷技術の発達で印刷物の大量生産・大量流通が可能となったことで、多くの消費者が目にし、「X」の色という認識や感覚が共有されるきっかけもなったのである。これら物理的および認識的な色の構築は^eミツセツ^eに関わっており、人工的に作り出された食べ物の色が人々の認識に影響を与える一方で、多くの人が共有する「自然な」色という認識が、^③翻^③つて^③食品生産者らによる色作りを規定してきた側面もある。

ここで「自然な」色という時、それは、人々がイメージする食品の「あるべき」色という意味で、「当たり前の」色とほぼ同義に用いている。よって、自然に（人工的な操作なく）出現した色という意味ではない。ここで注意してほしいのは、この自然な色やあるべき色という概念は、ある時代や場所において、人々が自然・あるべきだと考えるようになった色である。グローバル化が進み、食べ物が国を超えて手に入るようになった今日、おいしい色や自然な色は万国共通のもののようにもみえる。だが実際には、どんな色が食べ物の自然な色なのかは、時代によって変化し、国・文化によっても異なっている。また、食べ物の色を物理的に操作するにあたっての

II 企業や政府の対応、そして消費者の反応は様々である。そのため、食べ物の色は、非歴史的で地理的にユニバーサルなものではなく、特定の時代と場所にユニークな歴史的構築物として捉える必要がある。

(久野愛『視覚化する味覚―食を彩る資本主義』による)

問一 二重傍線部 a く e のカタカナを漢字に直せ。

問二 空欄 に入る最も適当な語句を、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ(同じ記号は二度使えない)。

- ア しかし イ そのため ウ さらに エ また オ とにかく

問三 傍線部①「指標」・②「せめぎ合う」・③「翻って」・④「ユニバーサル」の意味として最も適当な語句を、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。

- | | | | | |
|-----------|---------|---------|---------|---------|
| ① 「指標」 | ア 共通認識 | イ 到達目標 | ウ 伝達手段 | エ 判断基準 |
| ② 「せめぎ合う」 | ア 反発し合う | イ 関係し合う | ウ 競い合う | エ 繋がり合う |
| ③ 「翻って」 | ア 加えて | イ さらに | ウ 言い換えて | エ 反対に |

□ 次の文章は、江戸時代初期に作られた『変化ばなし』に収録された一話である。読んで、後の間に答えよ（設問の都合上、原文の一部を改変している。また、設問に字数制限がある場合、句読点・符号等はすべて字数に含む）。

① いづれの国主のときにか、会津の虚空蔵山の前の川を、毒流しをなされんといふことあり。

すでに明日にきはまりし夜、その里へひとりの法師来たりて鉢を乞ふ。家主、呼び入れてさまざま物語りせしに、この坊主いはく、

「うけたまはれば、明日、この川へ毒流しをなさるといふことあり。さらさら心得られず候ふ。この御ほとけは日本にかくれなき御ほ

とけにて、三虚空蔵のそのひとつにして、この国を守らしめ給ふ。この川はすなはち御手洗にて、つひに殺生の例を聞かず。されば、

この川に住む魚も、数百余年を経たる魚ともなれば、やうやく昇天を望んで、龍にならんとする魚もあるべし。しかるに、その本意

をも遂げさせたまはで、命をとられ候はんこと、なげきても、なほあまりあり。」と、涙を流して悲しむ。亭主も出家の心を入れ、殊勝

に思ひて、もてなさんと思へど、まづしくして饗応なし。粟の飯ありけるをあたへたるに、法師、心よげに食ひてかへりぬ。門をい

づると思へば見えず。不思議さにこのことをあたりほとりの者に語る。

夜明けければ、さまざまの毒の本草を切りいだし、つきはたき、もみこなして、かの川へ流しかけたれば、あまたの魚、死に浮かぶ。

その中に、太き二尺まわり、長さ二間あまりのうなぎあり。みな人奇異の思ひをなして、脇差しを持ちて腹をたちわりて見れば、粟の

飯あり。さては夕べ話したる坊主はうなぎの変化なりと、あはれみけるとかや。

国主……国守。国ごとに置かれた官吏の長。

毒流し……川に毒を流して魚を捕ること。

御手洗……神域近くを流れて、参拝者が手を清め、口をすすぐ川。

問一 二重傍線部 a 「殺生」、b 「奇異」の読みを、それぞれ現代仮名づかいで答えよ。

問二 傍線部①「すでに明日にきはまりし夜」の解釈として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア まさに明日で間違いない夜

イ 間もなく期限の明日という夜

ウ すべて明日に結論が出る夜

エ もはや決行が明日となった夜

問三 傍線部②「物語りせしに」の解釈として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 昔話をさせたので

イ 談話したところ

ウ あいさつを交わしたときに

エ 伝承を語り合っていたのに

問四 傍線部③「さらさら心得られず候ふ」の解釈として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 少しも望みどおりではありません。
- イ 決して承知できることはありません。
- ウ ましてや認められることはありません。
- エ どうしても思い通りにはなりません。

問五 傍線部④「守らしめ」の文法的な説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア ラ行四段活用の動詞「守る」の已然形に使役の助動詞「しむ」の未然形「しめ」がついたもの
- イ ラ行変格活用の動詞「守る」の已然形に尊敬の助動詞「しむ」の連用形「しめ」がついたもの
- ウ ラ行四段活用の動詞「守る」の未然形に尊敬の助動詞「しむ」の連用形「しめ」がついたもの
- エ ラ行四段活用の動詞「守る」の未然形に尊敬の助動詞「しむ」の未然形「しめ」がついたもの

問六 傍線部⑤「つひに」の意味として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 最終的に
- イ いよいよ
- ウ まだ一度も
- エ ともに

問七 傍線部⑥「その本意」とは何か。本文中から十文字から十五文字で抜き出して答えよ。

問八 傍線部⑦「もてなさん」の「もてなす」と同じ意味の言葉を、本文中から漢字二文字で抜き出して答えよ。

問九 傍線部⑧「門をいづると思へば見えず」について、何が「見えず」なのかが分かるように現代語訳せよ。

問十 本文が『変化ばなし』に収録された一話であることを踏まえ、この話の題名として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 毒流し イ 龍 ウ うなぎ エ 法師

問十一 『変化ばなし』と同じ江戸時代に書かれた古典作品を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 更級日記 イ 宝物集 ウ 日本永代蔵 エ 高瀬舟 オ 平家物語